

博士学位論文審査要旨

2023年5月10日

論文題目： **The Antagonists of God: Ideologies, Gender, and Christianity in C. S. Lewis's Novels**

(神の敵対者たち：C. S. ルイスの小説におけるイデオロギー、ジェンダー、キリスト教)

学位申請者： 野田 ゆり子

審査委員：

主査： 文学研究科 教授 臼井 雅美

副査： 文学研究科 教授 David John Chandler

副査： 文学研究科 教授 金谷 益道

要 旨：

本論文は、イギリス20世紀の作家であるC. S. ルイス (C. S. Lewis) の小説を取り上げ、第二次世界大戦を中心とした歴史的背景、ジェンダーの互換、およびキリスト教を軸に、悪を表象する神の敵対者について論じている。構成は六章から成り、第一章ではルイスによるキリスト教関連著作から善悪二元論に関する思想を考察し、第二章から第六章までは、第一章で分析したルイスのキリスト教の思想が彼の小説などの作品においていかに描かれているかを議論している。

第一章では、キリスト教における善悪二元論に関して、20世紀イギリスで活躍したキリスト教信徒伝道者としてのルイスのキリスト教に関する著作を分析することにより、善の完全性と悪の不完全性の対立という考えに基づくルイスのキリスト教の思想を考察してまとめている。

第二章では、*The Pilgrim's Regress* をナチズムや共産主義などの20世紀の思想と政治の寓意が内包された作品として考察し、当時勃興しつつあった悪としてのナチズムを無力化しようとするルイスの意図を分析している。第三章では、ルイスのSF三部作品の中の二作 *Out of the Silent Planet* と *Perelandra* において、科学至上主義、惑星植民地計画、創発的進化を信奉する科学者を神と対立させることにより神の敵対者が墮落する過程を論じている。第四章は、SF三部作の最終作 *That Hideous Strength* における、科学至上主義とセクシュアリティの問題に注目して、神が支配しようとする男性のみから成る科学者集団が自然や人間性を支配しようとした結果、神の敵対者として自己解体することを論じている。第五章では、*The Chronicles of Narnia* において、ジェンダーの互換可能性を持つ敵対者と神の対立が存在する点に注目して、ジェンダーの互換可能性を持つ神の敵対者が交換不可能な価値を持つ者の前で無力化して破滅することを論じている。最後に、第六章では、*Till We Have Faces* において、四つの愛のうちのストルゲーとアガペーを善悪の対立として分析することにより、異教の愛がキリスト教の愛により救済され、最終的に愛の対立を通して描かれる善悪の二項対立が無化していくことを分析している。

結論として、ルイスの小説において、その平面性と非完全性により、20世紀という善と悪の不透明な時代において悪を規定する存在となっている神の敵対者たちは、政治、思想、科学、ジェンダーなどのあらゆる場面で自己を神格化しようとするが、自らの存在の根源である善(神)を前に、無力化させられていると論じている。

第一章においてはキリスト教思想に対するより包括的な考察が、また第二章においてはイデオロギーに対するより精緻な考察が望ましいが、ルイスのキリスト教思想と小説の相関関係を分析して論じた点は、学位申請者の研究者としての優れた資質と将来性を十分に示すものである。よって、本論文は、博士(英文学)(同志社大学)の学位を授与するにふさわしいものであると認められる。

総合試験結果の要旨

2023年5月10日

論文題目： The Antagonists of God: Ideologies, Gender, and Christianity
in C. S. Lewis's Novels
(神の敵対者たち：C. S. ルイスの小説におけるイデオロギー、
ジェンダー、キリスト教)

学位申請者： 野田 ゆり子

主査： 文学研究科 教授 白井 雅美

副査： 文学研究科 教授 David John Chandler

副査： 文学研究科 教授 金谷 益道

要 旨：

上記審査委員3名は、2023年5月10日14:00から約2時間にわたり、徳照館会議室において、学位申請者に対する総合的学力確認の口頭試問を行った。

学位申請者は審査委員から提出論文に関する専門知識はもとより、関連分野への多様で深い質疑に対して的確かつ詳細な対応を行い、本論文の学術的価値が証明され、同時に学力水準の高さが確認された。

また、語学（英語・フランス語）においても、英語とフランス語で書かれた文学理論に関する学術書籍に関しての質疑応答において、十分な理解力と運用力を備えていることが確認された。

以上の学力確認の結果により、学位申請者は博士（英文学）（同志社大学）に相応した学力を有するものと判定する。

学位申請者は、上記の口頭試問に先立って、同日13:00より徳照館会議室にて公開講演会を行い、研究成果を広く社会に発信する能力を有することも確認された。

以上のことから、学位申請者の専門分野に関する学力および語学力は十分であると証明され、総合試験の結果は合格であると認める。

博士學位論文要旨

Abstract of Doctoral Dissertation

論文題目： The Antagonists of God: Ideologies, Gender, and Christianity in C. S. Lewis's Novels
Title of Doctoral Dissertation

(神の敵対者たち：C. S. ルイスの小説におけるイデオロギー、ジェンダー、キリスト教)

氏名： 野田 ゆり子
Name

要旨：
Abstract

本博士論文は、二十世紀イギリスの作家 C. S. ルイス (1898-1963) の小説における悪の表象について論じている。ルイスの小説において悪を体現する者たちは、しばしば神の敵対者として描かれ、その人物造形は平面的かつ単純であると批判されることが多い。しかし、こうした単純明快な人物造形は、作品における善 (神) と悪 (敵対者) の対立構造を際立たせていると考えられる。ルイス曰く、キリスト教の教義は、善と悪が対等の立場にあるとみなす善悪二元論を認めていない。全ての存在の根源が善であるがゆえに、悪は善を否定することによって根源的な自己矛盾に陥るためである。すなわち、ルイスの作品における善悪の対立は、善の完全性と悪の不完全性を浮き彫りにしていると言える。本博士論文の狙いは、キリスト教における悪の不完全性が、神の敵対者たちを通していかに表象されているかを分析することにある。

第一章においては、善と悪、および善悪二元論にまつわるキリスト教の思想を、ルイスのキリスト教関連著作を基に概観している。ルイス曰く、神は善であり、善悪の判断の指針となる自然法の存在は、絶対的な善の存在を明らかにしている。一方で、悪は高慢と結びつけられる。人類の原始の罪とされる高慢は、神と同等の存在になるという意志の表れであり、徹底的な自己への執着であり、結果的に人類を神と敵対させる。キリスト教においては、善と悪は対等な立場で対立するとみなされていない。キリスト教の教義は、善悪の存在の根源に絶対的な善、すなわち神が存在しており、全ての存在の根源が善である以上、悪はその絶対的な善から自己を切り離し、自己矛盾に陥っていると説く。こうした思想を鑑みたと、ルイスの多くの作品にみられる善悪の対立を分析すると、悪を体現する者たちはみな、自身を神と同等とみなす高慢さを持つが、その表象は絶対的な善の存在を前に脅かされ、やがては無に帰すこととなる。言うならば、ルイスの描く物語は、単なる勧善懲悪ではなく、圧倒的な善を前に、悪の存在そのものが根底から瓦解される過程を描いているのだと言える。

第二章においては、*The Pilgrim's Regress* の出版当時の歴史的背景に着目し、Savage と Dwarf たちの分析を通して、同時代の悪であるナチズムを無力化しようとするルイスの試みを分析している。*The Pilgrim's Regress* には、二十世紀イギリスにおけるあらゆる思想の寓意が登場する。中でも、半巨人の Savage は英雄的ニヒリズムを、Savage に仕える Dwarf たちはナチズムや共産主義を表象している。主人公の John と旅を共にする Vertue は、神 (The Landlord) の代理になろうとする Savage に説得されてしまうが、こうしたカリスマ的な牽引力は、ナチズムの政治宗教としての側面を想起させる。The Landlord の代理になろうという Savage の意志は、The Landlord と Savage の対立を浮き彫りにするが、The Landlord (「地主」) という表現に示されるように、世界を真の意味で所有しているのは神であり、Savage は単なる借地人に過ぎない。更に、Savage の権威を根本的に転覆させるのは、かつては人間であったにもかかわらず、人間

以下の存在となった Dwarf たちである。その動物的で野蛮な性格は、特定の政治的傾向に対する辛辣な批判であると同時に、真の信仰の対象を見極められなくなった者が辿る末路を示している。すなわち、間大戦期において勃興しつつあったナチズムは、*The Pilgrim's Regress* において善悪二元論の枠組みにあえて組み込まれ、キリスト教的な思想のもと、意図的に無化されているのである。

第三章においては、SF 三部作の二作 *Out of the Silent Planet* と *Perelandra* に登場する科学者 Weston に着目し、彼の科学至上主義、惑星植民地化計画、創発的進化（生命力）への信奉を通して、Weston と神の対立を論じている。ルイスは、科学や進歩に対して否定的な立場を取る稀有な SF 作家であった。科学や進歩を最優先させる科学至上主義によって、善意や倫理が喪失されることを危惧したルイスは、Weston が他惑星の生物を殺害するという、帝国主義を彷彿させる場面を挿入し、人類の欺瞞を前景化させている。ルイス曰く、他の惑星に墮落が広がらないよう、神は人類を隔離している。ゆえに、Weston の惑星植民地化計画は、人類の墮落を宇宙全体に広げるといふ点で、神に敵対する行為なのである。やがて Weston は、創発的進化（生命力）の信奉者になったと主張し、神も悪魔も人類の進歩のための動力に過ぎないのだとして、神を降格させ、悪魔の自立性を認める発言をする。最終的には自分こそが神であり悪魔なのだと宣言するに至るも、神と自身を同一化した Weston の高慢は、ついには Weston を「非人間（“The Un-Man”）」にしてしまう。ルイスが Weston を通して描いているのは、一般的に肯定される科学や進歩が、崇拜の対象となることによって墮落していく過程である。自己を神格化した Weston は神と対立する存在となり、ゆえに人間以下の存在に成り下がるしかないのである。

第四章においては、SF 三部作の最終作 *That Hideous Strength* における悪が、N.I.C.E.の同性愛的な傾向によって表象されていることについて議論している。N.I.C.E.は、自然、人類、やがては神の支配を目論む科学者集団である。N.I.C.E.と対立する St. Anne's の人々の多くが夫婦であるのと対照的に、N.I.C.E.はほぼ男性のみで構成されている。彼らは「内輪のグループ」への傾向を強く持つが、その自己愛と自己崇拜はやがて、肉体的繋がりへの欲求に置換されていく。このように、異性愛と同性愛の対立の枠組みが、善悪の対立の枠組みに内包されているのは、セクシュアリティがキリスト教の共同体にまつわる思想と密接に関連しているためである。Ransom をリーダーとして、確固たるヒエラルキーに基づき有機的に結合する St. Anne's の人々は、集団の中で自分自身に与えられた役割を全うすることを望む。一方、N.I.C.E.の人々は、同性のみで構築された集団であるがゆえに、新しい生命を生み出すことはない。科学的な方法によって生かされている科学者の首を文字通り N.I.C.E.の「頭」とみなしていることも、その結合の非有機性を浮き彫りにしている。N.I.C.E.の人々は最終的に、旧約聖書のバベルの塔の挿話のように、互いの言語を理解できなくなり、恐怖と混乱のうちに互いを殺戮し合う。ルイス曰く、自然に対する支配欲は、人間性（human nature）に対する支配への傾倒と、「人間の廃絶」という結果をもたらす。神を作り出し、人間以上の存在になることを目論んだ N.I.C.E.は、有機的な集団として各々の役割を全うすることを放棄した結果、やがては自らの高慢さゆえに自己解体していくのである。

第五章においては、*The Chronicles of Narnia* の *The Lion, the Witch and the Wardrobe* と *The Magician's Nephew* に登場する The White Witch (Jadis) のジェンダーの互換可能性が、神と The White Witch を対立させていることについて論じている。The White Witch の Jadis の名前の由来を辿ってみると、ルイスの叙事詩に登場する Wan Jadis に行き着く。Wan Jadis は男性だが、女性的な風貌をしているという点において、男性的な Jadis とは対照的である。すなわち Jadis という名前が象徴するのは、身体的な性を蔑ろにし、ジェンダーを交換可能とみなす行為なのだと推察できる。更に、The White Witch は、アダムの前妻であり、夫と同等の立場を主張したがゆえに追放されたリリスの子孫である。男女平等はジェンダーを交換可能にさせることと同義だというルイスの主張を鑑みると、リリスと The White Witch は、女性でありながら

男性と対等な立場にあらうとする点で、キリスト教的共同体における脅威なのである。The White Witch は、ナルニアに永遠の冬をもたらし、全ての存在を無個性にし、究極的に交換可能にしてしまう。Aslan の到来によって、全ての存在が交換不可能な個性をもって息を吹き返す描写は、The White Witch の支配下のナルニアとの対照性を際立たせる。The White Witch のジェンダー互換可能性は、Aslan の男性性の回復と、四人の兄弟姉妹による共同統治によって、完全に無化される。このように、ジェンダーの観点から見ると、神聖な価値を交換可能なものに降格させた神の敵対者は、交換不可能な価値を持つ者を前に無力化され、やがて滅びていくのである。

第六章においては、*Till We Have Faces*における Orual の神の敵対者としての特徴を、愛のテーマの観点から考察している。神の敵対者を一貫して他者化して描いてきたルイスだが、この作品においては、神の敵対者を語り手にしている。*Till We Have Faces*は、Psyche と Cupid の神話を、Psyche の姉の視点から語り直した作品であり、後に出版される *The Four Loves* で示される四つの愛（ストルゲー、フィリア、エロース、アガペー）と関連付けて議論されることが多い。この四つの愛のうち、特にストルゲーとアガペーの描写は、善悪の対立を際立たせている。異教の国の女王 Orual は、義妹の Psyche に対してストルゲー（愛情）を抱く。しかし Psyche が結婚し、Orual なしで幸福な人生を歩んでいると知ると、彼女の愛は憎悪へと変貌していく。Orual がストルゲーを神格化するプロセスは、やがてストルゲーとアガペーの対立をもたらす。神々の法廷で、Orual は Psyche の所有権を主張するが、真の意味で他者を所有できるのは神のみである、という思想に基づくと、ここで Orual は Psyche へのストルゲーのみならず、自分自身を神格化していると言える。だが、後に Orual は、Psyche に課された試練を肩代わりし、愛の源泉たる神の存在に気付くことになる。Orual の Psyche に対するストルゲーが、アガペーによって救済されるというプロセスには、異教の愛がキリスト教的な愛によって救済されるという、ルイスの包括主義的な思想を見ることができる。二つの愛の対立を通して描かれる善悪の二項対立は、ストルゲーがアガペーのうちに取り込まれていくことによって、事実上無化していくのである。

このように、ルイスの作品において、神の敵対者たちは、あらゆる方法をもって自己を神格化するが、自らの存在の根源である善を前に無力化していく。神の敵対者たちの平面性と非完全性は、善と悪の対立構造とその瓦解を示唆し、善と悪が不透明な時代において、悪がいかなる存在かを規定していると言えるだろう。